



笠原嘉の「小精神療法」小史
—「苦悩する者への愛ないし
は畏敬」から「病後の生活
史」へ—

大前 晋 編
金剛出版
2024年6月 268頁
本体価格 3,000円+税

大前先生（以下、敬称略）とはだいぶ前からの付き合いになる。歴史的視点を大切にしていることや、現代精神医学への批判を共有しているところで意気投合するのだが、小子が心惹かれるのはその徹底した探究ぶりである。それは歴史家・社会学者に近い。文献の渉猟は、直接関連するものにとどまらず、文化・時代背景さらには提唱者のおかれた学問的環境・人脈に及ぶ。これらが概念の提唱にどのような影響を与えたのかを論ずるスタイルが徹底している。理念型として理解すべき精神医学の多くの概念について、「提唱者の視点」を明らかにすることは重要である。概念だけが一人歩きし、提唱者が考えてもいなかったような使われ方をされたりすることの多い精神医学において、彼の研究はそれをしっかりとつなぎ止めておく錨のような役割を果たしている。

さて、大前が畏敬の念を抱きつつも敬愛してやまない先達のひとり、笠原嘉先生である。本書については2024年の札幌での日本精神神経学会学術総会で小子が座長を務めたデモラリゼーションのシンポジウムで初めて耳にした。大前は第63回日本精神神経学会学術総会（1966年、東京）におけるシンポジウム「精神療法一般の治癒機転についての一考察」を振り返り、基調講演者笠原先生と指定討論者土居健郎先生の、精神療法家としての重要な違いを指摘した。土居先生は患者の精神に積極的に介入し、さながら外科医のように、患者の裸の精神に解釈と称するメスをしばしば加えるのに対し、笠原先生は患者の精神に対する介入は最低限にとどめ、むしろその心に寄り添い・支え、時間の経過を味方につけて自然と回復するのを待つという。本

書を読めば患者に臨む笠原先生のスタイルがよくわかる。

本書の構成は、第1部「小精神療法のすすめ—『病後の生活史』に寄りそう」、第2部『『小精神療法』小史—笠原先生に聞く」、第3部「附録 うつ病の小精神療法」の3部構成からなっている。第1部と第3部は既出論文をまとめたもので笠原先生の小精神療法についてよく知ることができる。メインとなるのは第2部の二人の対談である。この対談は第46回日本精神病理学会（2023年10月、針間博彦会長）の特別講演として企画されたもので、当日は1時間の編集映像が公開され大変な好評を博した。準備に要した対談時間は合計7時間31分に及ぶというのだから、公開された映像だけでなく本書に収録されたものもそのなかから取捨選択したものだろう。ここでは笠原先生ご自身の臨床家、研究者そして個人史が語られているのだが、大前の研究スタイルが遺憾なく発揮されている。大前は笠原先生の書かれたもの、それに関するものほぼすべてに目を通しているのではなかろうか。「先達に聞く」というこの手の対談と大きく異なるのは笠原先生が語り手で、大前が聞き手に徹するというスタイルではないことである。大前は笠原先生の生きた時代を追体験しながら、ありありと当時の状況を描き出し、そして、その時代を実際に生き抜いてきた笠原先生が自らの体験を語っている。そのような笠原先生と大前のいわば共同作業がこの対談であり、さながらわが国の精神医学の歴史の1つの側面を振り返っている感である。親子以上の年齢差がある二人だが、大前は笠原先生に寄り添い（感情移入し）、時に笠原先生が大前の人生に関心を寄せる場面もある。二人のあたたかい心の交流が読み手にも伝わってくるだろう。笠原先生が小精神療法のエッセンスとして最後に付け加えたのが「苦悩する者への愛ないし畏敬」であるが、それは一人ひとりが皆違う人生を歩んでいることを尊重し、そこにあたたかな関心を寄せることの大切さを述べたものである。それはこの対談にも通ずるところである。余談だが、対談で登場する多くの登場人物が「消しゴムはんこ肖像」になっている。これがクスツと笑ってしまうような愛らしさがあり、本書の雰囲気とよくマッチしている。どの世代の精神科医にも推薦したい一冊である。

（古茶大樹）